

麻生区区制 30 周年記念事業

パネル討論会

麻生区の 30 年の歴史とこれからを語る

2012 年 10 月 5 日 13:30~16:00

麻生区役所第 1・2 会議室



パネリスト

西村俊行氏 初代区長

瀧峠雅介氏 現区長

中島豪一氏 しんゆり芸術のまちづくりフォーラム会長

小島一也氏 麻生観光協会副会長

山田昌一氏 麻生区文化協会顧問

司会進行 菅原敬子 麻生区文化協会会長

主催 麻生区文化協会

共催 麻生区役所

区制制定 30 周年記念討論会「麻生区の 30 年の歴史とこれからを語る」

第 1 部 麻生区の 30 年の歴史を語る

菅原：麻生区は文化芸術の街として充実してきました。今年が分区から 30 年です。分区に関わった方々やその後の発展に尽くして頂いた方々に来て頂きました。はじめに初代区長の西村さんに分区のいきさつをお話頂きたいと思います。



西村：私は、退職後秦野に移ったので、その後のことは十分把握していませんが、記憶している範囲でお話します。



【政令指定都市指定】S47 年 7 月 1 日、川崎、札幌、福岡の 3 市が政令指定都市になりました。急激な人口増加で分区する必要性が認識されていました。S32 年から S38 年に人口は 50 万を突破、その頃から、政令指定都市（人口 100 万以上）移行ということは話題になっていました。

S46 年 8 月 国から 3 市が指定都市に移行することが決定、S47 年に川崎区・幸区・中原区・高津区・多摩区の 5 区が誕生。その当時から、その後の人口増が見込まれ、特に高津区、多摩区はものすごい人口増になってきました。

【分区の経緯】S56 年、小田急が新百合ヶ丘周辺地区の区画整理の中で、将来、市民館・区役所・保健所・・・を網羅した土地が必要ということで、市で準備されていました。新区は新百合ヶ丘に設置されることが当時から言われていました。そんな中、3 月 新区開設準備委員会が設定されました。1 年にわたっていろいろ審議が行われ、S57 年 7 月に麻生区が発足しました。

川崎市は、人口動態を配慮して分区を考えていました。そして S57 年、高津から宮前区が分区すると同時に多摩区から麻生区が分区し、川崎市は 7 区になりました。

分区の考え方は、人口急増・都市化進展が著しい地域に分区によって行政サービス向上を図るということでした。行政区の人口規模は 15 万から 20 万が適正といわれてきたのですが、7 区にして近い将来各区 17 万の都市にしたいと、そんなことで麻生区が誕生しました。

【区名制定のいきさつ】S56 年 1 月区名選定委員会が発足。28 名の委員が指名されました。委員は、市議・各界代表・市民（一般公募）から構成されました。S56 年 2 月から 3 月にかけて 5 回にわたって審議しました。第 1 回には、歴史的・簡潔・他区と紛らわしくないという 3 つの原則が決められ、市民の意見を反映しようということで一般公募をしました。その結果、多摩区では 715 の応募が、高津区では 632 の応募がありました。第 2 回会合で、上位 20 位までを選定対象とする。ありふれた名称を避ける。機能的な名称を避ける。などを原則としました。百合・山手・光などはその意味で適当でないが、保留してほしいという住民の要望が多く、その結果、柿生区・百合ヶ丘区・山手光区・麻生区から選ばれることになりました。さらに審議の結果、百合ヶ丘・山手光は歴史性が乏しいと言うことで、柿生区・麻生区に絞られました。麻生は、歴史的に古くから使われ、8 世紀から「からむし」を広く産した土地として記述されていました。一方、柿生は上麻生が中心で、他地区の住民には柿生の名称に抵抗がありました。委員会は、柿生・麻生が

同数となり、宮本委員長が決定することになりましたが、歴史学者の村上先生の意見を聞くこととなりました。村上先生は、柿生は上麻生が政治の中心であったこと、麻生は歴史的由来があることを答申され、最終的に委員会は1票差で麻生区に決定したのです。

菅原：中島豪一さんは新百合ヶ丘の開発、街作りの中心となって来られました。そのあたりのことをお話してください。

中島：さきほど西村さんからは、行政の立場に立った細かい話がありましたが、私どもは裏で仕事をしてきました。私と西村さんはたまたま同じ年（1925年生まれ）で、多摩の新区準備室以来懇意なつきあいがありました。先ほどの話はあくまで表向きの話で、裏にはいろいろな話がありました。



【区名制定のいきさつの裏話】麻生区に決まっていたいきさつの裏には、高石・細山が生田村から分離して参加したということがあったのです。柿生区になると、高石・細山には柿生村に合併されたという感じを持つ人がいました。市議会議員同士、町会同士で話し合いました。たまたま、私は町会の仕事をしていたのと、個人的に高石・金程に親戚があったので情報が入ってくるので、高石・細山・金程が生田村から分離して麻生に来るように仕向けました。

今でこそ、麻生に入ってよかったという声を聞きますが、当時はいろいろあって、飲み屋で調整するなどいろいろありました。最後は、難しいことがあれば、(38度線の)境界線である万福寺で話し合っただけいいといいました。おかげさまで円満に今日を迎えることができました。西村さんの話は表面で、裏は大変でした。町会長が葉書をどっさり買ってきて、投票しろと言うようなこともありました。こんにちには平穏になりよかったと思います。

【新百合ヶ丘駅付近の開発】私は、S52年から新百合の街作りを手がけることとなり、はじめは公務員として勤めていたのですが、強引に30年勤めた役所を辞めさせられて、新百合の開発に務めました。ある日突然山の中に6線ものホームがある新百合ヶ丘駅が出現。小田急沿線でも最大の駅でした。小田急線がS2年に開通したとき、もとの線路は丘の下にあって、その当時の部落のトップが、ここに駅を作ると農家の若手が農業をしなくなると危惧し、小田急は駅を柿生に持って行ったのでした。その結果、何にもないところに新百合ヶ丘ができたので新しい街作りができたのです。柿生も今のままではどうしようもないと思うが小島さんどうですか。新区というのは、偶然というか、思い切ったことをやらないとできないのです。

菅原：小島さんは、この地域の歴史の研究者であり、議会の議長さんもやられたので、柿生・栗木・黒川・岡上など、30年間の経緯をよくご存じです。小島さんどうぞ。

小島：中島さんから、夢のよう。おかげさまで。という話が出ましたが、私も、農家のせがれなので、こうしてここにいることが夢のようです。今日にいたるまでいろいろ問題があって、言うに言われぬ問題もありました。



【柿生地区の開発と農住都市構想】S24-25年、柿生駅の前、今のサープラス柿生の前に間組がありました。これは、相模湖から長沢に上水道を引っ張っていました。当時、川崎市は先見の明がありました。いまもハザマ谷戸と呼ばれます。S25の頃の柿生地区は農村でした。S30になるとディベロッパによる土地開発が始まります。S35には百合ヶ丘団地が、S30-35に、いわゆる乱開発が始まり、農家が土地を売る様になりました。農業者が米作

りを捨てて土地を売るのは問題と鈴木新之助さん) という方が 350 万平米の農住都市構想を発表しました。しかし、大都市の住宅問題の深刻化を受けて、大都市法ができて、宅地供給をせまりました。農業と良好な宅地の共存が鈴木さんのねらいでした。その名残が地権者による土地整理組合です。幸い大手(三井不動産、小田急)が良心的な開発をしたことが、今につながっているのではないのでしょうか。

【開発と農業と自然保護のバランス】 歴史の中での課題は、自然だけでは生活できないということです。農業基本法が制定され、農業振興地域には農家は子や孫のためにも家が建てられない。今、それが麻生区に緑を残しました。それが黒川・岡上・早野地区です。しかし、農業振興を図りながら地域の自然をどう残しどう運営していくかが今後の課題です。開発と農業と自然保護をどうバランスをとるか。自然保護ということでアセスが必要となり、そのために開発が中止になることもあります。こういうことで農協組合員の方には、ご不満・ご苦労があるようです。振り返ってみて、川崎市のマニフェストがよかったのではないのでしょうか? 地権者の方が自分の土地でありながら、郷土愛があったのではないか。もう一つは、市民のみなさまの知性・両親があつて、今日が迎えられたのではないかと思います。

菅原: 山田さんは細山美術館をもつ日本画家です。地域のなかで、細山、千代ヶ丘の 30 年の発展を見てこられました。

山田: 細山・千代ヶ丘の歴史を 15 分で話せと言っても無理な話です。今日はそのほんの一部をおおざっぱにはなします。



【細山には住民の助け合いの精神が】 ご承知のように、細山・向原は、S12 年に川崎市に編入されたのですが、当時、川崎のチベットと呼ばれ、各谷戸に 10-15 戸の農家が点在するだけの辺鄙なところでした。しかし、この地区は、農業だけでなく、養蚕・養鶏・養豚・炭焼き・林業など多角的に営んでいました。細山には「結(ゆい)」という住民の助け合いの精神が旺盛でした。困った人があればみんなで助け合って暮らしていました。道が狭く、1 年中水がある湿田で、胸までつかうような深田という悪条件でした。

【細王舎の農機具が全国に普及】 そんなところに、明治 22 年先々代箕輪政次郎さんがきて、細王舎という工場をつくり農蚕機械器具の発明改良製作に着手します。当時、養蚕が盛んだつたので座繰機械を作りました。2 代は亥作さんが継ぎ、足踏み式脱穀機を開発、全国に広め、さらには、朝鮮・台湾・東南アジアまで普及させました。そういう人たちに細山の生活が助けられたのです。

【モデル農村に指定】 S4 年、細山は、神奈川県唯一のモデル農村に指定されます。その要件は、戸数 50 戸以上、一致団結して農業改善の意気込みがある、園芸・養蚕等多角化、交通機関があるということでしたが、細山はこの全ての要件を満たしていました。S4 から 3 年間に 2200 円の奨励金が出たとありますが、今のお金で言えば億に近い大金でした。これを使って県の井上技師を招き、道路を拡張、深田を暗渠排水して二毛作が出来る浅田に改良、機械で草取りができるように農地区画を整理。さらには、香林寺岡本重辰住職による農繁期託児所の開設があり、秩父宮妃殿下のご来訪などがありました。

【地権者の姿が消えないような開発】 その後、高石の一部が百合ヶ丘団地になり、多摩

美団地の開発、さらには三井団地の開発などがあって、細山にも都市化の波が押し寄せました。細山では「地権者の姿が消えないような開発」を掲げ、土地整理組合を結成、造成に当たって業者には45%、地権者には55%が残るように造成、S55年には香林寺に細山郷土資料館を作って、生活用品を展示、過去のいろんな道具を使って地域学習の場としてきました。

菅原：途中で遮って申し訳ありませんが、現区長瀧峠さんお願いします。

瀧峠：麻生区ができて30年が経ちました。その間の麻生区の歩みは配付資料にまとめてあります。



【区制10年まで】S47年に川崎市が政令指定都市になったのはT13年に市になってから48年目でした。その年は、札幌で冬季五輪が開催されています。翌年川崎の人口は100万人になります。そしてS49年小田急多摩線が開通。新百合ヶ丘駅が開業します。S55年には細山郷土資料館開館、S57年麻生区が分区。それからの10年のあいだに、S59年文化協会発足、S60年文化センター開館、S61年スポーツセンター開館と整備がすすみます。

【川崎市の総合計画】H4年、区制10周年、その後H5年に川崎市の総合計画ができ、新百合周辺に川崎副都心の形成と明記、川崎市は多摩川に沿って長いのですが、臨海部中心に発展しましたが、地域の一体性がかみにくいということで、川崎駅付近を玄関に、新百合を副都心として街作りすることとなり、小杉付近を第3の都心と位置づけました。その後H14年に20周年を迎えるまで、マイコン地区、駅周辺商業地区の整備がすすみます。さらにH16年には、多摩線にはるひ野駅が開業、H19年には昭和音大が移転、アートセンター開館などがあり、新施設を含めて発展します。

【川崎再生フロンティアプラン】また、この間、H17年に川崎再生フロンティアプランができ、新百合ヶ丘地区は魅力ある広域拠点形成とされています。芸術文化施設が充実し、それに関わるかたも多く、また、緑・自然の保全を活かす取り組みが行われています。今後は、調整区域・緑・まちづくりをどう融合させるかという課題も出てきていると感じています。まちづくりの課題について、関係する行政・地域の人たち・企業の方々と連携していくことが重要だと思います。

菅原：ありがとうございました。

【文化センター開設のいきさつ】文化のまちの中心的施設である文化センターがどのようにして建てられたかについて、私から少し付け加えますと、S54年に川崎北部住民から市議会に文化施設についての陳情書が提出されるとともに募金が集められました。S56年に市民館建設の請願書が採択され、息の長い取り組みが始まったのです。S59年にさきほど紹介があったように文化協会が藤田親昌さんをリーダーとして発足、S62年に文化センターがオープンします。麻生の文化は、生活そのものが文化、区民の多面的な文化要求に立って、多くの市民が関わる文化センターができました。花道があるホールもユニークです。これも市民の要求で実現したものです。また楽友協会、いけ花協会、美術家協会、日舞協会などたくさんの文化団体が発足し活動しています。また、中村正義美術館、山田土筆美術館、さらには劇団民藝もあって、施設を中心にいろんな団体が活動していることを知って頂きたいと思います。

第2部 麻生区のこれからを語る—伝統と歴史をふまえて—



うた「かがやいて麻生（麻生音楽祭 20周年記念に公募した曲）」の合唱

菅原：第1部では、麻生区のこれまでの歩みを、それぞれの方々のお立場でお話頂きました。アンケートをご紹介します。「柿生がかawaiiそうと思いました。」……(略)……

第2部では、それをふまえて、麻生区のこれからを話していただきたいと存じます。

西村：私は、区長を辞めてから20年くらい中島さんのまちづくりを事務局長としてお手伝いしました。その後、私は、秦野に引っ越したので、最近の街の発展はわからないのですが、最近、片平の友人からつぎのような手紙が来たのでご紹介します。「麻生区に住んで幸福です。和やかな空気は素晴らしいです。東京の友人から手紙が来て麻生に住みたいといっています。自然があって文化的催しがある。」と。私も麻生に住みたいと思っています。もう無理ですが。(笑) その片平の人も麻生区に住んで幸福を感じています。文化的ないずれの催し物にも簡単に参画できる。他からうらやましがられる。私の今住んでいるところのすぐ近くに、元柿生の高校の先生がいて、柿生はよかったと話し合っています。潤いのある楽しい街にしていきたいものです。

菅原：今の新百合ヶ丘、山口台も山手も中島さんが開発されました。これからのまちづくりについてお話頂きたい。

中島：光栄な感じがします。身に余るお話を承ったが、ここに生まれ、この街でたまたまこういう時期に生まれてきたということで、好きでやってきたわけではないのです。皆様が麻生に住みたい、住んでいてよかったという街を作るのが私の責任だと思ってやってきました。何が不足か、何が必要かを絶えず頭において、やっています。お金がかかるので、他力本願ですが、大手会社が思い切った話をもってきてくれないかと思ったりします。例えば、小田急が本社を新百合ヶ丘にもってきてくれたらなと考えたりしています。今思っていることは、新百合ヶ丘を交通の拠点にすることです。横浜地下鉄の延伸、川崎縦貫高速鉄道が来たらもっと発展するでしょう。今も文化人が多くお住まいですが、便利で特徴ある街にしないと、そういう人がなかなか来ていただけな

いと思います。皆様のお知恵を借りながら進めたい。その街に何が不足して何が必要かを考え続けます。

菅原：小島さん。アンケートに「柿生がかわいそう」という感想もありましたが、今、新百合ヶ丘一点集中になっていて、柿生・百合ヶ丘が取り残されている感もあります。どうお考えでしょうか。

小島：柿生ってよいところですね。市民ミュージアムで川崎縄文一万年展がありました。広いフロアに展示された埋蔵文化物の半数近くが、麻生区に集中しているのです。黒川、山口台、早野、万福寺（先土器時代：国の重要文化財級の価値あり）。開発が進み、黒川にははるひ野が、万福寺には新百合山手が、上麻生には山口台が人気を博しています。そういう風土なのです。今も昔も人間が住みたいところは同じなのです。多摩丘陵の最高峰は黒川の丸山です。146m。導水トンネルがあります。例えば、細山・高石・向原、勝ちどき峠、120m くらい。百合ヶ丘三丁目見晴台公園、すばらしい。住んでみたい理由のアンケートでは、自然が豊かな街 72%、医療・福祉が充実している街 60%、文化施設が充実している街 34%、買い物が便利な街 31%です。麻生区は、これらを全部ほぼ充足しています。自然をどう保全していくか、市街化調整地域、農業振興地域をどうするか。わたしは、観光協会の役割を担ってみて、自分が住んでいる街にもう一度光を当ててみる。再発見ですね。マップを作る。写真集を作る。ここは圧倒的に神社仏閣が多い街です。お宮は13, お寺は14ありますが、お宮は合祀のせいでこの数ですが、もとは40ありました。地べたが大きい麻生区。23 平方キロもあります。多摩区は 20、宮前区は 16、幸区は 9 です。因みに最も大きいのは川崎区ですが、これは埋め立て地のためです。このように麻生区は縄文時代から歴史が詰まっています。「観光」ですが、自分の街を改めて振り返って見ることが自然保護につながるのではないのでしょうか。都市農業を振興する施策が必要でしょう。音楽大学、映画大学に来ていただいたのですが、白山にはお宮の土地があったからです。麻生区の地べたの大きさを尊重して見直すことが重要です。また、野仏にお花が添えてあります。栗木 3 丁目に道祖神がありますが、いつもお花と折り鶴が供えてあります。このように麻生区には地域力があります。文化人がいます。自信・誇りを持ってやっっていこうではありませんか。

菅原：第 1 部では山田先生のお話を途中で遮ってしまい失礼しました。ぜひその続きをおっしゃってください。

山田：わたしは、細山の造成に対する住民の気持ちを話したい。地域の造成は「地権者の姿が消えないまちづくり」が基本です。乱開発を止めるには、業者がやるのではなく、地域の人が力を合わせて、文化・生活を継続できる地域作りをやることです。その結果、住んでいた人々の屋敷が残されました。また、何か所か地域に公園なども残した。難しいことはわかりませんが、細山の人が守ってきたみんなが心一つにして力を合わせて助け合っていく方向に持って行くとうよいと思っています。また、よい環境作りが必要です。麻生区の今後を考えると、環境の整備と、優れた文化を続けて欲しいと思います。最近、道で会っても挨拶しなくなりましたが、地域の人が互いに声を掛け合うような雰囲気が必要です。

細山郷土資料館に展示してあるものを見ることで、昔の人がいかに力を合わせてやってきたかを伝えていきたい。「温故知新」を勉強してほしい。誰が言ったか記憶していないが、「現在の自分というものは今までのすべての人たちからの贈り物である」という言葉を大切にしたい。これからは子どもたちに良い贈り物を残していきたいと思います。

菅原：最後に、現区長としての抱負を

瀧峠：歴史年表でも市の総合計画をお話ししましたが、「川崎市総合フロンティアプラン」は50年を見通して、23,24,25年度にわたる3年間の実行計画を示しています。麻生区での4つの大きな柱は、①芸術文化のまちづくり推進、②スポーツのまちづくり推進、③コミュニティ活動・地域活動の進展、④高齢者・障害者・子どもたちが安心して暮らせるまちづくり推進です。まず①については、昭和音楽大学の誘致、ついで日本で初めての日本映画大学の開学、そういう資源を十分に活かして音楽・映画だけでなく、歴史や暮らしの文化などをきちんと見直し、発掘して後生につなげていく。大きな特徴は、この地域には隣接地域も含め、昭和音大、映画大、田園調布学園大、和光大、玉川大、そして明治大黒川農場と6つの大学キャンパスがあることです。若い方がいて、活気が出てきています。緑・自然・農業も魅力ありますが、さらに麻生のよいところを延ばしていきたい。区外の人にも、より多く知ってもらうまちづくりが重要と考えています。さきほど山田先生から「結」という話がありましたが、3.11以来「絆」という言い方もありますが、地域の人が分担しながらよい暮らしを作っていく。地域を広げるとともに、世代間の連携を広げていくことが大切です。高齢化も進んでいます。地域活動も年配者が多い。区民会議が7月からスタートしました。安全・安心のまちづくり、若者が住みたくなる魅力あるまちづくり、世代間を含めた絆、連携を進めることも重要であると思っています。

菅原：ありがとうございました。すこし付け加えますと、アートセンターがあります。設立5周年を迎えます。ぜひ映画・演劇を盛んにしてもらいたい。アルテリッカしんゆり、5年になります。すばらしい芸術的な行事です。麻生音楽祭も、しんゆり映画祭も他にないイベントです。麻生区の年齢構成は、現在65才以上が19.3%ですが、2020年には23.3%、2030年には26.4%、2040年には31.4%、2050年には34.7%に達すると予想されます。若い人が魅力を感じ、住みたいと思うまちづくり、住んでもらい、来てもらい、若者に実感をもってもらいたい。区民会議としても、若い人たちが住みたくなるまちづくりを議論しています。

麻生区文化協会が提案して、区の木として禅寺丸柿、区の花としてヤマユリが採択されました。その禅寺丸柿は2007年に国の「登録記念物」に指定されました。このたび区制30周年を記念し、10月21日（日）に新百合21ホールで「禅寺丸柿サミット」が行われます。

創造文化をどうやって創っていくか、農業、自然をどう守っていくか、これら麻生区の今後の課題に取り組んでいきたいと思えます。本日は、パネリストの皆様、また参加していただいた皆様に感謝します。ありがとうございました。





麻生区区制 30 周年記念パネル討論会記録

「麻生区の 30 年の歴史とこれからの語る」

発行日：2012 年 12 月 1 日

発行者：麻生区文化協会 会長 菅原敬子

215-0004 川崎市麻生区万福寺 1-5-2 麻生市民会館内
